

出 版 刊 行 助 成

1940年代素人演劇史論 表現活動の教育的意義

横浜創英大学こども教育学部教授

小川 史

【出版物の概要】

(著者名)	小川 史
(出版社)	株式会社 春風社
(発行日)	2021年3月29日
(発行部数)	700部
(価格)	5,000円

【刊行の目的】

本書の目的は、主に以下の二点である。第一に、これまで注目されなかった、日本における素人演劇の歴史を明らかにすること、第二に、演劇活動がどのような教育的な性格を持つのか、また、持つとみなされてきたのかを明らかにすることである。歴史的に、素人演劇は教育的な性格を持つとみなされてきたが、教育学からも演劇学からも、詳しく取り上げられることがなかった。本書は、素人演劇の意義が幅広く議論された1940年代を中心に、以上の点を明らかにしている。

【期待される効果】

本書が期待している主要な効果は、素人演劇の歴史をより広く知ってもらうことであるが、とりわけ、現在アマチュア演劇の活動を実践している市民に、それらの活動の歴史的文脈や歴史的性格を理解してもらうことがある。演劇活動の実践は、歴史的な蓄積を持ち、それらが行なわれる時代に応じた特徴を示している。また同時に、演劇活動の教育的な意義をめぐる数多くの議論が存在する。そうした歴史的な文脈・性格について理解を深め、演劇活動をより意義のあるものにするための一助になればと考えている。

販路としては、全国書店・インターネット書店への流通、大学・公共図書館への案内、春風社ホームページでの紹介、学会での販売などを行う。また、主な読者ターゲットとしては、演劇活動を実践している市民以外にも、演劇・教育・歴史研究者、学生、演劇を愛好する一般読者等を想定している。

【その他の考察】

本書は、1940年代の日本における演劇活動、とくに民衆による演劇活動を、教育学の見地から歴史的に検討するものである。

1940年代は日本の歴史上、民衆が参加する形態の演劇活動がきわめて広範に行われた時期であった。1940年代前半、すなわち戦時下では総動員体制に沿った文化政策の一環として、また、1940年代後半、すなわち敗戦直後の占領下では民衆の自発的な活動として、日本各地で幅広く演劇活動が行われた。両時期においてさまざまな演劇活動の試行が見られ、興味深い報告が資料に多数残されている。それらは表現活動としての演劇の教育的な意義を検討する上できわめて示唆にとんだものであるが、これまで1940年代の演劇活動を取り上げた研究はほとんどなかった。

では、1940年代において演劇活動はどのように行われたのか。近代以降、日本では民衆の演劇活動に対して政策的な支援策がなされていなかったが、その方針は日中戦争頃から大きく転換する。長期戦が見込まれる中で、労働力の効果的な再生産の必要性が認識され始め、同時に、総動員体制を進めるにあたってそこに統合されるべき民衆の意識改革が求められた。演劇活動は、そのための有効な方策として捉えられたのである。演劇は娯楽として参加者に楽しみをもたらしながらも、協力して作り上げるという特性から、動員の手段として都合がよく、なおかつ上演作品の中で総動員体制にとって模範的な行為を提示することもできる。これらを利点と想定しながら、「素人演劇運動」が始まったのであった。この運動は、職業演劇人たちが関わった「移動演劇」とともに、戦争末期まで続けられた。

敗戦をむかえると、各地域で演芸大会が流行し、同時に、青年団などを中心として演劇活動が盛んに行われた。それらは素人演劇運動の効果ではなく、民衆が自発的に行い始めたものであった。当時、総動員運動は終わりを告げていたが、代わって演劇活動を後押ししたのは日本共産党およびそれに関わりのある作家や演出家たちであった。彼らは、労働者や農村の青年に働きかけ、コンクールを開催して活動を活発化させようとした。そこに農山漁村文化協会や各新聞社などの斡旋も加わったことで、演劇は戦後の文化活動の柱ともなった。

こうしてみると、1940年代の演劇活動は、敗戦を境として、まったく逆とも言える政治状況下でそれぞれの時代性を色濃く反映しながら展開されたことがわかる。そればかりか、前半期と後半期とでは、実際に行われた演劇の性格や演劇に対する位置づけも異なるものとなった。前半期では、国家によって演劇活動を行う機会が付与され、総動員体制の枠組の中で表現の機会が与えられたのだが、後半期では、民衆が自分から主体的に演劇表現を獲得してゆく姿が確認できる。そこで民衆は、自主的に表現を行いつつ、あるべき表現のあり方を模索していた。こうした試みが幅広く見られた戦後のこの時期はまさに未曾有の時期であり、研究の価値はきわめて高いものがある。

小川史
Chikashi Ogawa

明治 漢字 漢字 漢字 漢字

一九四〇年代

素人演劇史論

表現活動の
教育的意義

演劇を通して
表現することをめぐる、
自発的・主体的な
あり方とは？

合版用

明治末期に民衆芸術として生まれ、
昭和期の戦時体制で用いられた
素人演劇の変遷を、その特性や
表現活動に含まれる教育的な
意味を検討し、生活に根ざした
表現による
自他理解の
様相を描き出す。

定期借地権マンションの法的課題と対応

横浜市立大学 国際教養学部 教授
齊藤 広子

【出版物の概要】

(著者名) 齊藤広子
(出版社) 信山社
(発行日) 2021年3月30日
(発行部数) 800部
(価格) 8800+消費税 円

【刊行の目的】

定期借地権マンションの法的課題と対応を示し、日本で不動産制度として、土地建物の一体化、また所有から利用の促進、期限のある建物の利用の仕方を示し、日本の安心な暮らしに寄与することを目指す。

【期待される効果】

定期借地権マンションの供給の促進、マンションの再生の困難さからの解放、安価で良質なマンションの促進など、マンションをはじめ、不動産の適正な供給、管理、終焉に寄与するものとなる。具体的な法的課題と対応策の提示から、マンション、住まいを取り巻く社会システム整備に寄与するものとなる。

【その他の考察】

本書は、マンションに関する専門家、事業者、実務家・研究者等を対象にしたものである。法律をベースにしているが、建築学などの工学分野をはじめ、幅広い専門家・研究者を読者として想定している。販売については、講演や執筆活動で紹介するなど、広報につとめる。

齊藤広子

定期借地権マンションの 法的課題と対応

学術選書
借地借家法

O210

マンションの再生と終焉のあり方を問う

土地・建物が別々の不動産であることの問題点と一体性の方向を探る。
定期借地制度による不動産の所有から利用への転換と借組みを含む、
マンションの円滑な終焉のためのシステム整備を提唱する。渾身の書。

8240-01011 定価：本体 8,800円(税別)

信山社